

ほのぼの News Letter



No.2 2014年6月号

一般社団法人 ほのぼの運動協議会



CONTENTS

-
- | | | | |
|---|----------------------------|----|-------------|
| 2 | 思いをつなぐ忘れな草プロジェクト2014
序章 | 9 | イベント反省・収支報告 |
| 4 | 銀座編 ～3月8日、9日～ | 10 | お知らせ |
| 6 | 代々木公園編 ～3月16日～ | | |
| 8 | ボランティアのみなさんの声 | | |

思いをつなぐ 忘れな草プロジェクト2014

序 章

2014年、ほのぼの運動の新たな事業として始動した東日本大震災被災地復興支援プログラム、「思いをつなぐ忘れな草プロジェクト」。2013年10月に企画が決まってから、2014年3月のイベント開催までの軌跡をご報告いたします。



■忘れな草プロジェクト実行にいたるまで

2013年8月。ほのぼの運動協議会として初めて、東日本大震災の被災地を訪れました。そこで目にした復興とは遠い現状に、大河原理事長はじめメンバー全員が、継続して支援することの必要性を強く感じ、決意しました。

そういった「被災地をこれからも忘れずに応援していこう」という思い、さらには被災地の前向きな一歩となり、今後の産業にもつながっていくものとして大河原理事長の発案で「忘れな草プロジェクト」は生まれました。そもそも、大河原理事長はこれまで様々な慈善事業を支援して感じてこられたことのひとつに、継続的支援の重要性があります。ほのぼの運動協議会としても、その点にはこだわってきました。そこで、今後も継続していくことのできる活動として、農業がふるわない福島で育てたワスレナグサと、三陸で磨かれたホタテ貝を、都心でチャリティ配布する。同時に募金を募り、それをまた翌年のワスレナグサの栽培とホタテ貝の加工に当てるというシステムを思い立ちました。

■磐城農業高校へ

2013年10月にプロジェクトが生まれ、翌年の3月にはイベント開催が間に合うようにと、支援先でもあるNPO法人日本園芸療法研修会の協力を得て、大急ぎで準備に取り掛かりました。

まず最初に問題となったのが、ワスレナグサを育ててくれるところです。どうせやるなら未来にかなげられるように子どもたちに育ててもらいたいと農業高校に白羽の矢をたてました。ところが福島県内の農業高校に依頼をかけてはみたものの知名度がないこと、また直前の依頼になってしまったこ

とから、なかなか打診を受けてくれる高校がありませんでした。

そんな中、真っ先に手を上げてくださったのが、福島県立磐城農業高校の太田恵理子先生です。「はい、やらさせていただきます」という先生のひと言は、すべてが手さぐりの私たちに大きな勇気を与えてくださいました。早々にプラント苗をお送りしたところ、受け取った生徒たちの驚きと笑顔の様子を、写真に撮って送っていただきました。そこにあったみなさんの表情は、これからプロジェクトを遂行する力強さを私たちに与えてくれました。

2か月後の2月14日、都心が大雪に見舞われたバレンタインデーに、栽培状況の確認と取材を兼ねて磐城農業高校へうかがいました。雪の舞う中、コートも着ずに下校してくる生徒たちとすれ違いながら、広い敷地を歩いてたどり着いたのは、仮設の校舎でした。そして、生徒たちは寒い仮設校舎の廊下で、お弁当を広げていました。

そこで、生徒代表の4人と太田先生、実習助手の斎藤先生から、お話をうかがいました。当初、6棟あったビニールハウスが震災で2棟倒壊、4棟でワスレナグサを栽培していたそうです。ところが、その前の週に降った大雪で、さらに1棟が倒壊。1,000鉢のうち、100鉢ほどがダメになってしまったものの、生き残ったものを救い出して育ててくれていました。

太田先生は、仮校舎で、しかも少ないハウスでうまく育成できるか、もし失敗したら当協会はもとより生徒たちにも残念な思いをさせてしまうことになる、大きなプレッシャーを感じていたそうです。にもかかわらず、ご快諾くださったこと、そしてこんなに立派に育ててくださったことに、ただただ感謝しかありません。ワスレナグサの贈呈式のあとは、生徒のみなさんの夢などについてもうかがい、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

そして、もう一箇所、ワスレナグサを育ててくださったのが福島県立相馬農業高校です。あいにくスケジュールの調整がうまくいかず、相馬農業高校の取材は断念せざるを得ませんでした。が、写真から、ワスレナグサを育ててくださっている生徒のみなさんの様子を教えていただくことができました。イベントの当日に向けて着々と育っていくワスレナグサの姿が、そこにありました。



磐城農業高校のみなさん



大雪で倒壊してしまったハウス。ワスレナグサが押しつぶされていた。



左から斎藤先生、太田先生、杉本さん、小針さん、作間副理事長、幕内さん、小野さん、澤田園芸療法研修会代表理事。

思いをつなぐ 忘れな草プロジェクト2014

銀座編 ~ 3月8日、9日~

イベントの初日は、3月8日土曜日に銀座で。初めてのイベントに、手探り状態でのスタートでした。そして、翌9日の日曜日も銀座で。はじめこそ緊張したものの、最後には両日とも多くのボランティアスタッフの笑顔あふれるイベントとなりました。

■3月8日(土) 銀座にて

週末のたびに悪天候が続いていたものの、この日はお天気に恵まれました。土曜日の朝8時という早い時間の集合にもかかわらず、大学生から社会人まで総勢30人ものボランティアが続々と集合。場所は、銀座四丁目交差点すぐにあるKAORUKO フローリスト銀座です。集まると同時に初顔合わせのみなさんと仕事を分担し、準備に取り掛かりました。ワスレナグサの鉢植えをフラワーアーティストのKAORUKOさんのアレンジで素敵にラッピングしていきます。福島から上京したばかりの磐城農業高校のみなさんもいっしょに準備を進めました。スタートからみなさんやる気満々のところ、大河原理事長のあいさつでさらに盛り上がり、気持ちがひとつになったようでした。

開始時間の11時前には、4階の事務所から降りてビルの前に一列に並んで、配布する体制に。いざスタートです。この日は、NHKや新聞各社も集まり、並ぶが早いか取材ラッシュとなりました。磐城農業高校の生徒とそこに向けられたフラッシュの数々に道行く人々は、興味を持ちつつも、圧倒



3月8日のボランティアのみなさん。初めてのイベントで緊張もひとしおでした。

されるように通り過ぎていってしまいました。

さらに、銀座という場所柄か、なかなか手にしてもらえないという、スローなスタートでした。それでも、みんな元気に声を出しつつ、ようやく昼すぎから人出も多くなり、受け取ってくれる人も増えてきました。それが励みになってか、ますます声も力みが抜けて、明るく張りのある声に変わっていきました。このプロジェクトの趣旨やワスレナグサの育て方などを説明しながら、次々とワスレナグサと祈り貝を手渡していきました。

そうこうするうちにあっという間に当日配布分がなくなり、予定より早い15時前に終了。最後はみんなでのぼのぼの運動のルーツである鯛焼きで乾杯。一応解散したものの、ボランティアスタッフはその後も残って翌日分の準備に精を出してくれました。

■3月9日（日） 銀座にて

前日同様、素晴らしいお天気の中、福島の高校生がいなくて大学生に頑張ってもらうと11時のスタートを目標に手際よく準備を進めました。初参加の方もいたため、10時30分にアテンションをし、社会人ボランティアとして参加された室屋佳子さんの「えがお体操®」で緊張をほぐしました。

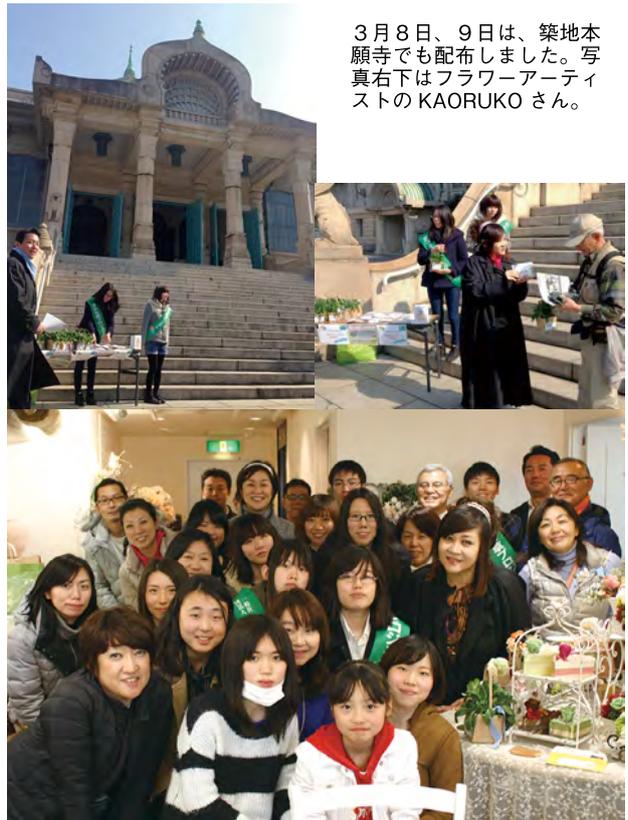
初日同様スタートはのんびりかと思いきや、前日の夕方にNHKのニュースで模様が放映された影響で、なんと11時のスタートを待つ列ができていました。猛スピードでワスレナグサと折り貝を配布しながらも、ボランティアメンバーも慣れてきたようで、立ち振る舞いもとても自然でした。前日より、上手に休憩を回しながら、道行く人の問い掛けにもそれぞれが工夫して対応することができました。

そんなとき、都内の高校生がボランティアで駆けつけてくれました。しかも制服で、一気に若いパワーがあふれました。また小さなお子さんや小学生もボランティアに参加してくれてとても和やかな時間でした。

この日は、おかげさまで前日より早い14時に終了し、この日も最後はたい焼きで乾杯！

みなさん、自発的に参加して下さった方なので、笑顔いっぱいの楽しいボランティアをしてくださいました。イベントの主催者として、うれしいかぎりの2日間でした。

場所を提供くださったKAORUKO フローリスト銀座様、KAORUKO 先生もありがとうございました。



3月8日、9日は、築地本願寺でも配布しました。写真右下はフラワーアーティストのKAORUKOさん。

3月9日のボランティアには、小さなお子さんから社会人まで、さまざまな年代の人が参加してくださいました。

各種マスコミにも取り上げられました!!!

NHKのニュースをはじめ、朝日新聞（福島版）、福島民友新聞、福島民報新聞、いわき民報新聞、北海道新聞、花卉園芸新聞、『BIG ISSUE』、さらにはラジオにも。多数取り上げていただきました。



思いをつなぐ 忘れな草プロジェクト2014

代々木公園編 ～3月16日～

3月16日の日曜日には、アイルランド商工会からご招待いただき、“アイ・ラブ・アイルランド” フェスティバルにブースを出店させていただいてのイベントでした。相馬農業高校のみなさん、石巻からの参加もあり、とてもにぎやかな1日になりました。

■ “アイ・ラブ・アイルランド” フェスティバル

翌週16日のワスレナグサと祈り貝配布は、アイルランドのお祭り“アイ・ラブ・アイルランド” フェスティバル内で行なわれました。

これは「アイルランドを一般の方にもっと知ってもらおう」と、1992年から行われているアジア最大のアイリッシュイベント「セント・パトリックス・デイ・パレード東京」にあわせて、今年初めて開催されたお祭りです。私たちほのぼの運動の「忘れな草プロジェクト」に共感くださったアイルランド大使から特別にブース提供のお話をいただき、参加することになりました。

この日も前の週に負けないくらいの好天に恵まれ、9時に相馬農業高校のみなさんや祈り貝を磨いてくれた石巻市からのみなさん、そしてボランティアスタッフも集合しました。まずは前日到着したワスレナグサのメンテナンス。その数1000鉢を相馬農業高校の持地先生、恵泉女学園大学准教授であり、園芸療法研修会の代表理事でもある澤田先生の指導の下、一つひとつきれいに整えていきました。銀座のときにはまったく咲いていなかったワスレナグサも、ぽつぽつと花が咲きはじめており、初めて実物を見たスタッフは大喜びでした。またブース設営もあれこれ工夫しながらの準備で、大忙しの朝となりました。初めて会う人ばかりなのに、みなさんすぐに打ち解けて、素晴らしい雰囲気でのスタートでした。



相馬農業高校のみなさんと大学生。それぞれうまく分かれて、楽しく作業していました。

のスタートでした。

フェスティバル自体は10時に始まりました。午前中こそ静かだったものの、アジア最大というだけあって時間が経つにつれ人出が増えていきました。外国人も多く、なれない英語でいっしょうけんめい趣旨を説明するスタッフの姿もちらほら見受けられました。

また、メインステージでは陽気なアイルランド音楽やダンスが次々と披露されており、とても賑やかでした。私たちも順番に休憩を取り、お祭りも愉しみました。

■ セレモニーでワスレナグサと祈り貝を謹呈

午後になると、ジョン・ニアリー駐日アイルランド大使とフランスス・フィッツゼラルド青少年児

童相が私たちのブースに立ち寄ってくださいました。大河原理事長の通訳で、少しのあいだですがお話もさせていただき、記念撮影も。ちょうど相馬農業高校の生徒が着ていたジャンパーがグリーンとクローバーだったので、アイルランドのテーマも同様とのことで、大使もたいへん喜んでくださいました。実は、このお祭り、参加者は全員アイルランドのテーマカラーである緑をどこかに身につけるというルール。私たちもみんなどこかしらに緑色を着けて参加していたのです。相馬農業高校のみなさんが身につけていたのが、このジャンパーでした。

ステージも3時からセレモニータイム。実は、高校生がステージに上がって、自分たちで育てたワスレナグサと折り貝を大使に直接お渡しするという機会を特別に設けていただきました。緊張しながらも、立派に大役を果たしてくれた高校生たち。きっと思い出に残る体験になったのではないかと思います。

そのセレモニーのおかげか、その後はあっという間にワスレナグサは無くなり、予定より1時間も早く終了してしまいました。5時には、参加者全員が集まり、恒例のたい焼きで乾杯。みんなで記念撮影をして、あちこちでお別れのあいさつをしながら、解散となりました。

その後の大使館からの情報によると、主催者発表の来場者は2万人と目標にしていた1万人の倍を達成したそうです。そして、有難いことに、来年もこのお祭りに参加させていただきそうです。

こうしてイベントは終わりましたが、その後も「ニュースで見た」、「ワスレナグサをいただいたので募金したい」、「協議会の活動を詳しく教えていただきたい」などの連絡をいただき、合計で約35,000円、個人の方から追加でご寄附をいただきました。初めてのイベントで課題も多く残ってはいるものの、価値ある第一歩を踏み出すことができました。



セレモニーでは、緊張気味の高校生のみなさんも、舞台を降りると、のびのび。
(下段左の写真) ジョン・ニアリー駐日アイルランド大使とフランセス・フィッツゼラルドアイルランド青少年児童相を囲んで。
(下段右の写真) 3月16日の全員写真。最前列左から相馬農業高校の遠藤さん、持立さん、小黒さん、山田さん、石巻の永山さん。

◎ボランティアのみなさんの声

忘れな草に込められた意味にはとても説得力があり、これからも忘れな草を配っていったらいいのではないかと思います。

花村 馨 (大学生)

受け取ってくださる方とコミュニケーションをとりながら活動できて本当に良かったと思います。水をあげる度に震災のことを思いだし、考えるきっかけになると思います。

S・K

特に今回は新しいプロジェクトの始まりの年ということで、その最初の活動に参加するという貴重な体験をさせていただくと同時にこのプロジェクトの成り立ちや活動を立ち上げた方々の話を聞くことで刺激を受け、自分も今後自発的に地域に貢献できるよう努力していきたいと思いました。

Y・H

南三陸でのボランティア活動に参加した直後で、考えることも多かった。年月が経つに連れ人々の意識は低下しつつあるが、震災を忘れずに追悼していきたいと思った。ここ東京にいるからこそ自分が出来る支援の形を、今後も考えていきたい。

K・K

単純な作業ではなくコミュニケーションをとりながら募金をお願いしたり忘れな草や折り貝のことを説明できたことで私たち自身も震災を忘れないようにしようという思いが一層強まりました。

S・K

これから持ち歩けないからと言って何も貰わず募金だけして立ち去る人や、がんばってねと優しく声をかけてくれる人、好意的に声をかけてくれる方々が多くて日本って良い国だな、と実感しました。観光で来られている海外の方々は何も貰わずに募金だけしてくれた時すごく感動しました。このボランティアを通して、自分から率先して動くことの大切さを感じました。

Y・T

東北の高校生や先生とともにたわいもない会話をし、楽しく過ごしましたが、彼らの『復興への道はまだまだですが』という言葉に胸に刻み、来年、再来年とこの活動にまた参加したい、そして自分にできる復興支援を続けていきたい、とそう思いました。

濱野夏希

自分にとっては、復興のために何かやろう、何かやろうとずっと思っていた中で何もできずにいました。そういった中で今回この忘れな草プロジェクトに参加したことによって、さまざまなつながりが生まれましたし、これからも復興に向けて何か支援に行こうと改めて決意することができました。

川野真治

彼女たちのような経験者が情報を発信しようと活動していることが、時が経っても震災を忘れないこと、そして復興を少しでも早めることに繋がると思いました。また、震災復興支援のために、現地へ行かなくても、今、自分のいる場所でやることを実感しました。

K・N





◎今回寄せられた反省点

【ほのぼの運動として】

- ◎店舗と一緒に活動できなかった。
⇒配布を希望する店舗には、忘れな草や祈り貝を送るなど連動するのが理想。
- ◎11月開始だったので、栽培、貝の洗浄などを含め、準備期間が非常に短かった。
⇒1年を通して準備できるようにすれば負担は軽減できる。

【イベント当日に関して】

- ◎道行く人を囲むような整列の仕方は避ける。
- ◎「お願いします」と募金を募るのではなく、「忘れないで」のメッセージを伝える。
- ◎英語表記のメッセージも用意する。
- ◎街頭に立つ際、被災者とボランティアとの区別があったほうがいいのではないか。
- ◎被災者と話す機会をもう少し作ってほしい。
- ◎のぼりやフラッグを設置して、遠くから見ても何をやっているかがわかるようにする。

【忘れな草プロジェクト収支報告】

実施日：2014年3月8日、9日、16日

収入金額	
寄附金収入	759,948
活動協力金(ポポラマーマ)	361,166
ほのぼの運動	314,586
合計	1,435,700
被災地の活動支援金	
ワスレナグサ栽培費	157,060
ホタテ貝洗浄費	60,000
旅費・交通費	254,003
寄附金	
寄附金(相馬農業高校、磐城農業高校、被災地児童学習支援SOLA)	300,000
被災地支援費合計(活動支援費+寄附金)	771,063
その他の経費	
包装資材費	245,687
施設使用料等	173,950
販促物作成費	245,000
合計	664,637
支出金額合計(被災地の活動支援金、寄附金、その他の経費)	1,435,700
差引	0

上記のように、募金等の寄附金はすべて被災地支援費に利用。その他の経費は、(株)ポポラマーマおよびほのぼの運動からの支援金を充当しました。

お知らせ

カーネーションをチャリティ配布

お花を通じたチャリティイベントを開催している「マーチ オブ ブーケ」と「母の日トルコフェア」を共催いたしました。トルコ共和国から寄贈された1000本のカーネーションを、母の日である5月11日に銀座4丁目交差点近くのKAORUKO フローリスト銀座前で配布、募金を募りました。当日は、トルコ大使も参加され、たいへんな賑わいとなりました。なお、今回集まった募金は、忘れな草プロジェクトを継続するために福島の花卉園芸の発展のために活用させていただきます。



地域貢献プロジェクトがはじまります

今年の募集期間は6月末から9月末までです。準備が整い次第、順次ポスター等資料をお送りいたしますので、店頭に掲示し、お客様とのコミュニケーションのきっかけとして、またお店の価値向上のため、ぜひ少しでも多くお声がけをしていただければと思います。

東日本大震災復興支援事業として立ち上がった「忘れな草プロジェクト」は、外部の人たちの協力の下で運営いたしました。上智大学をはじめとするご縁のある大学の学生や有志たち延べ100人ものボランティアの協力を得ながら、無事成功を収めることができました。東北や東京の高校生、そしてあちこちの大学生が一堂に集まって想いを一つにしている姿は、日本の未来を創る若い力の芽生えを感じました。最後は恒例になりつつある「たい焼きで乾杯！」みんなで鯛焼きを食べてお開きです。しかし、まだまだ課題はたくさんあります。今後はこの活動を拡大させつつも、店舗の皆様にも参加いただける仕組みを構築していきます。

副理事長兼事務局長 作間由美子

東北支援商品「ずんだ・つぶあん」販売

ほのぼの運動加盟の鯛焼きの店舗では、東北支援商品「ずんだ・つぶあん」が6月15日から7月末まで販売されます。1匹につき3円が、ほのぼの運動を通じて国際環境NGOのFoE Japan「ぽかぽかプロジェクト」（福島の子ども、妊婦に放射線量の低い地域に短期避難していただく）に寄附されます。



募金箱の回収時期のお知らせ

ご協力いただいている「ほのぼの募金箱」の回収時期が近づいてまいりました。今後の流れは、

- ◎6月末で金額を確定
 - ◎7月15日までに会員事業所・店舗等から会員本社・本部に入金
 - ◎7月末日までに会員本社・本部からほのぼの運動協議会に入金
- となっております。

詳しくは手引き書に記載してありますので、そちらをご覧ください。また、その他わからないことがありましたら、ほのぼの運動協議会事務局までお問い合わせください。

ほのぼの News Letter No.2

発行日：2014年6月10日

発行：一般社団法人ほのぼの運動協議会

編集制作：ほのぼの運動協議会 事務局

〒164-0012 東京都中野区本町 4-31-12

井口新中野ビル1F

TEL:03-5328-1275 FAX:03-5328-1280

問い合わせ：jimukyoku@honobono-undo.org